

なぜだろうなぜかしら

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

著者にも身に覚えがあるが、小学校あたりでは先生が何か質問をすると、率先してハイハイと子供たちが手をあげる光景に出会う。これが中学、高校と学年が進むにしたがってだんだん手をあげるのが減っていき、挙句の果てに指名して質問をすると、当然のことながら「分かりません」と答える。大学では、さらにこれが進化して、教室の後ろの方から席が埋まり、できるだけ関わらないようにしよう、あるいは出席を取らないなら早々に抜け出そうとする。これを現在の学生気質とあきらめてはいけないのだが、大学の大綱化によって大学の在り方や単位制度が大きく変わった。その一方で、大学評価、授業評価が通常になり、契約意識もほとんどない学生による評価がすべての大学で行われている。逆に授業評価をやっていないと大学評価で好ましくないと評価されることになるのだが、これには根本的な問題があるように思われてならない。それは、評価する側も評価される側もほとんど緊張感がないことである。40年前著者が滞在していたドイツの大学の工学系では、Dr.の学位をとってさらに高度な研究を行った後、Habilitationという資格審査があり、これに合格するとhabilitiert Privatdozent Professor Doctor-Ingenieur 誰それという長い肩書になる。ここで言うPrivatdozentは私講師とでも訳せばいいのだろうか、1800年代、講義をやって受講生から受講料をもらっていたことに端を発したものであろう。このような場合には、受講料を支払う方も受講料で飯を食う方もかなりの緊張感があつたのではないだろうか。もっとも当時でも既に大学のレジャーランド化が問題にされていたようで、その点、今も昔も変わらないのかもしれないが。

さて著者は大学入学前の留学生に対して物理の講義をしている。著者自身は機械屋なので物理に無縁というわけではないが、「物理」という科目を学生に教えた経験などない。大学入学したての1-2年、つまり今から半世紀ほど前に物理の講義を受けた程度の経験で、場合によっては説明不足のときもなきにしもあらずである。そんなとき、留学生たちが何かと質問してくれる。日本の学生相手に講義していた折には、比較的積極的と思われる学生でも、講義が終わって皆がいなくなりかけたところに質問にやってくる程度だった。わからないことが恥ずかしいのだろうか。さきに述べた授業評価で、学生に対して積極的に質問するように促したかどうか、あるいは学生側から講義に対して予習復習をし、積極的に質問したかどうかといった設問があるのだが、ほとんどの学生が「どちらともいえない」つまり良くも悪くもない中間であると印をつける。これは積極的に講義に参加していない証拠でもある。彼らの講義に参加する意欲の違いだろうか。留学生たちはいわば留学前教育で、単位を落とすと明年度大学に入学できないし、大学では日本語で講義があるため、言葉を理解し、大学入学に備えなければならない。そのような状況であるからなのかもしれないが、時には学生たちと比較的長く、また様々な事例を交えて説明することもあり、私自身も講義をするのがそれなりに楽しい。その時のやり取りはそれを横で聞いている学生にとっても理解の

助けになるはずである。

我が国では教育の質向上など盛んに議論されている。さきに小学生たちが積極的に手をあげると書いたが、それは教師の質問に対する答えが分かった時だけであり、自ら疑問点を見つけ出し教師に質問を投げかけたいからではない。しかしこれができなければ自ら学んだことにはならないし、きっと後々大学生になっても教員に質問をするようにはならないだろう。教員のやるべきことは教えることではなく、疑問を持たせることと心得るが、ではどうしたらそうなるのか、簡単な方法はない。聞き手の子供などに何故、何故と聞き続け、答えを出さずに子供たち同士で考えさせる、場合によっては現物を見せる、現場に連れて行って感じさせ考えさせるといった余裕のある授業と教員の辛抱と戦略が必要なのだろう。いつまでにここまで教えないといけないといったことを重視してはかなわないことではある。

子供の頃図書館にシリーズ物で『なぜだろうなぜかしら』といった本があった。内容は全く忘れてしまったが結構面白かったような記憶のみがある。そもそも本のタイトルを覚えているのだからきっと印象が良かったのだろう。

